

中京・シンポ 企業関係者や教諭

障害者雇用の実例発表



障害者の就労支援について意見を交わすパネリストら
 (京都市中京区・京都新聞文化ホール)＝撮影・山本健太

が向上している」と同ネットの意義を強調。今後も取り組みを続け「(障害者が)住み慣れた地域で暮らし、働き続けるようになれば」と期待を込めた。

シンポは、京都新聞社会福祉事業団の主催で、会場とオンラインで計約70人が参加した。障害者向けの保険を販売する「ぜんち共済」(東京都)の榎本重秋社長の講演もあった。(田代真也)

障害のある人の就労支援を考えるシンポジウムが13日、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。乙訓地域で障害者雇用を進める企業の社長や特別支援学校の教諭ら3人が、実際に雇用して感じたことや地域で連携することの大切さを発表した。

乙訓地域では、福祉や教育関係者が昨年度に「乙訓圏域障害者就労支援ネットワーク」(通称たけのこネット)を立ち上げた。障害者対象の企業説明会や職業体験を開催し、これ

までに3人の就職につながったという。

うち1人を昨年4月に採用した建築資材販売会社の桂建材店(京都市西京区)の小原弘也社長(52)はシンポで「障害者雇用なんてできないと自分で壁をつくっていたが、実際に雇ってみると従業員とも打ち解け、お互いに高め合ってくれている」と話す。

企業に送り出す側の向日が丘支援学校(長岡京市)の夏川久子教諭(60)は、実習などを通じて「生徒たちの働きたいという気持ち

3. 2. 14 京都